2018.10

やさしい囲碁史

第22回

囲碁対局場いまむかし

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

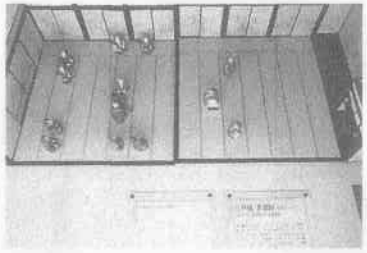
棋士が公式戦を打つ場所といえば、現在は通常の対局が関西棋院などプロの団体の対局室、タイトル戦なら旅館やホテルの一室と相場が決まっている。

千二百年以上前の平安時代には貴族の邸宅や仏教寺院で、棋士が職業として確立した安土桃山時代から江戸時代にかけては武家屋敷で対局することが増えたようだ。

江戸時代、もっとも格式高い対局場といえば1626（寛永３）年に始まったとされる「御城碁（おしろご）」（当初は京都・二条城）が行われた江戸城内だろう。将軍家から俸禄（ほうろく）を受ける家元の棋士にとっては、年に一度の大切な務めでもある。

対局室は本丸御殿の「黒書院」が主に使われ、実際に将軍が観戦することは少なかったようだが、老中など高位の武士が列席した。

激動の昭和初期には、戦災で焼失した日本棋院会館の代わりに料亭のお座敷や愛棋家の自宅で打たれたりもした。変わったところでは1941（昭和16）年、第２期本因坊戦第一次予選トーナメント決勝の橋本宇太郎七段対久保松勝喜代七段戦が、久保松の体調に配慮し東京・慶應病院で打たれている。



江戸城・黒書院における御城碁の再現模型
（日本棋院囲碁殿堂資料館所蔵）

科学の発達した現代では対局場のバリエーションも増え、一部はインターネットでも行われるようになった。プロではないが、1996年１月にスペースシャトル「エンデバー」で宇宙飛行士の若田光一さんとダニエル・バリーさん（アメリカ）が人類初の「宇宙対局」を行っている。

2018.11

やさしい囲碁史

第23回

歴代本因坊が多く出た埼玉県

古作　登（大阪商業大アミューズメント産業研究所主任研究員）

初代本因坊の算砂は京都寂光寺の僧侶だったが、その跡を継いだ歴代本因坊は囲碁の技芸に優れた者が選ばれ、その出身地は日本全国に及ぶ。さかのぼること数百年、平安時代に「碁聖」と呼ばれた寛蓮も現在の佐賀県鹿島市の出身で、都に上って宇多天皇、醍醐天皇に仕え碁の技量をもって名を知られるようになった。

江戸時代に武州（東京、埼玉、神奈川の一部）と呼ばれていた地域の出身である八世本因坊伯元（1726～1754）は武蔵国幸手郡（現在の埼玉県幸手市）の生まれ。27歳の若さで没したが、病を得たあと井上春碩因碩（1707～1772）の助けを借りて、弟子の間宮察元を跡目とする願書を寺社奉行に提出し認められた。

その九世本因坊察元（1733～1788）も同地の出身。棋力に秀でた察元は幕府に名人・碁所就位を求め、井上春碩因碩との争い碁にも勝って長らく空席になっていた名人に、ついで碁所にも就き「本因坊家中興の祖」と呼ばれた。また、恒例となっていた寂光寺への墓参の際に、本因坊家の威光を示すため大規模な行列を組んで莫大な出費をしたことでも知られる。

察元が跡目に指名したのが十世本因坊烈元（1750～1809）。烈元も察元に匹敵する実力で八段準名人まで進んだ。

八世本因坊伯元の墓所

烈元は江戸の出身とされるが、伯元、察元とともに墓所は幸手市に存在する。今夏、足を運んだ三本因坊墓所のうち最も立派なのは六段にとどまった伯元のものだった。